

## 古代掘立柱建物遺構における身舎外周柱の上部構造

はじめに 本稿は、古代の官衙・寺院遺跡等で検出される掘立柱建物遺構において、身舎柱とその外周にめぐる柱の上部構造の推定根拠を明確にすることを目的とする。身舎外周柱をもつ建物跡は、身舎柱と外周柱の柱筋が揃うかどうか、といった視点で、外周柱が、①揃う、②身舎柱間中央に位置、③柱筋と柱間中央の両方に位置、④不規則の4種、また身舎柱と外周柱の柱穴の大きさ、といった視点で、I：同径、II：身舎柱が大きい、III：身舎柱が格段に大きい、という分類がされている（『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈文研、2003）。

外周柱の構造については、廂、裳階、縁などの柱や東が考えられるが、類例として検討すべきものは、やはり現存建築遺構だろう。ただし、これらはいずれも礎石建物であり、柱だけでも自立する掘立柱建物とは、構造的な差異がある可能性を否定できない。しかし、ひとまず礎石建物の様相をまとめておくことが必要だろう。

いっぽう、掘立柱建物の上部構造を考えるための前提としては、柱穴掘方が大きければ柱が太い、柱穴が深ければ柱は長い、柱が大きければ建物の荷重が大きく、複雑な構造も可能で、これが施主や建物の格式を表している、という解釈がある。これは、たとえば柱が細いのに大きな掘方を掘る必然性がないのではないか、あるいは柱が短いのに深い掘方を掘る必要があるのか、といった、半ば常識的な判断でなされることが多い。もっとも、掘立柱による歴史的建造物が遺存しない日本においては、これを実証する術がない。

これらと比較すべき礎石建物では、柱が長ければ柱径は太く、柱が短ければ柱径は細い、また屋根形式の差、すなわち身舎と一体型の廂と、身舎と別構造の廂（非一体型）では柱径にも差がある、と考えるのが一般的である。

本稿ではこういった視点から、現存遺構の身舎柱と廂柱・裳階柱・縁束の大きさや長さなどについて検討し、上部構造を考えるための一助としたい。なお、この検討は、2011年12月に開催した「第15回 古代官衙・集落研究会 四面廂建物を考える」で発表した内容の一部であり、この報告書は2012年12月に刊行される予定である。

検討資料 表11は、およそ鎌倉時代初期くらいまでの現

存建築遺構30例について、廂のとりつき方、柱の大きさと形状、柱長等のデータを列挙したものである。このうち、29薬師寺東院堂は1285年、30興福寺東金堂は1415年の建立だが、奈良時代創建時の平面を保つことから例に加えた。このほかこの時期に属する塔も比較的多数あるが、薬師寺東塔が裳階をもつために例に加えた以外は、検討の対象としなかった。表中で数値が記載されていないもの、たとえば14海竜王寺西金堂は、身舎のみの建物であり、廂や裳階が存在しないため、当該部分にデータを記載できないことを示している。なお、ここでは四面廂建物のほか、上記のような身舎のみの建物や、4法隆寺伝法堂のような二面廂の建物を含めている。

**身舎と廂の柱径・柱長** まず身舎・廂の柱径、および柱長についてみてみよう。表11をみると、A：柱径・柱長とも同じ、B：柱径は同じだが身舎柱が長い、C：身舎柱が太く、長い、という3形式に分類できることがわかる。このうちAの実例は、1法隆寺金堂と30興福寺東金堂で、『营造法式』という12世紀初期の中国の建築技術書では、「殿堂」というもっとも格の高い形式に分類されている。また古代の塔はすべてこの形式となる。柱長が身舎と廂で等しいため柱径も等しいという、先述した礎石建物についての一般的な解釈が妥当であることを示している。

Bの事例は、3法隆寺夢殿、5法隆寺食堂、7東大寺法華堂正堂、10榮山寺八角堂、12唐招提寺講堂である。いずれも奈良時代に属し、それ以後にはみられず、奈良時代においては優勢だった可能性がある。これは礎石建物についての一般的な解釈とは異なっている。

Cの例は、礎石建物についての一般的な解釈と合致し、平安時代以降はいずれもこの形式となることがわかる。ただし身舎と廂の柱径の差は、26法界寺阿弥陀堂が0.5尺程度異なるのが最大で、奈良時代の4法隆寺伝法堂、9法隆寺東室、11唐招提寺金堂では、大きくても0.2尺程度の差しかない。

以上から、AとCについては、およそ礎石建物についての一般的な解釈で説明できるものの、Bについては、一般的な解釈とは異なり、奈良時代の建築に特有の形式だった可能性がある。ただし、Cについても、柱径の差はわずかであり、冒頭に述べたI～IIIの分類との対応、すなわち現存遺構（身舎・廂一体型）から掘立柱の柱穴規模を推定するすれば、26法界寺阿弥陀堂のほか平安時

表11 現存建築の柱径と柱長

堂塔名	建立年代	建物規模 桁行×梁行	廂数	柱の大きさと形状(単位:尺)								柱長(単位:尺)			備考
				身	舍	廂	形	裳階(縁)	割合 <sup>*1</sup>	形	柱筋 <sup>*2</sup>	身	舍	廂	裳階(縁)
1 法隆寺金堂	7C後	5×4	4	1.90	1.90	丸	裳0.68	0.36	角	否		12.35	12.35	裳9.07	
2 薬師寺東塔	730年	3×3	4	1.73	1.75	丸	裳0.78	0.45	角	合 <sup>*3</sup>		15.66	15.66	裳8.92	
3 法隆寺夢殿	739年	八角円堂	8	1.37	1.37	八角	—	—	—	—		18.61	13.92	—	
4 法隆寺伝法堂	8C中	7×4	2	1.53	1.42	丸	0.65	0.42	角	合		15.67	11.47	2.26	縁は正面5間 もと政所の建物か
5 法隆寺食堂	8C前	7×4	2	1.30	1.30	丸	—	—	—	—		14.06	10.43	—	
6 法隆寺細殿	13C	7×2	—	1.00	—	—	—	—	—	—		10.06	—	—	
7 東大寺法華堂正堂	8C中	5×4	4	1.80	1.80	丸	0.61	0.34	角	側面合		18.77	15.26	1.12	もと内部床張り
8 東大寺法華堂礼堂	13C中	5×2	—	1.63	—	—	0.61	0.37	角	側面合		15.26	—	4.13	桁行柱間、正堂とそろえる
9 法隆寺東室	8C中	12×4	2	1.21	1.02	丸	0.60	0.50	角	合		13.28	10.72	1.80	南端聖霊院接続
10 萩山寺八角堂	8C中	八角円堂	4	1.36	1.36	八角	—	—	—	—		18.54	14.59	—	身舍正方形平面
11 唐招提寺金堂	780年頃	7×4	4	2.00	1.90	丸	—	—	—	—		18.63	15.57	—	
12 唐招提寺講堂	8C後	9×4	4	1.62	1.62	丸	—	—	—	—		16.72	15.50	—	もと平城宮東朝集殿
13 新薬師寺本堂	8C末	5×3	4	1.56	1.44	丸	—	—	—	—		17.12	13.89	—	桁行中央間15.75尺
14 海魔王寺西金堂	8C	3×2	—	1.35	—	—	—	—	—	—		11.47	—	—	身舎のみの金堂
15 室生寺金堂	9C前	5×5	4+孫廂	1.35	1.19	丸	0.80	0.59	角	合		14.92	11.85	1.72	正面に孫廂、径12尺丸柱、身舍梁行1間
16 法隆寺大講堂	990年	9×4	4	2.20	1.90	丸	—	—	—	—		20.40	16.60	—	旧桁行8間×梁行4間
17 平等院鳳凰堂中堂	1052年	5×4	4	2.00	—	—	裳0.85	0.43	角	合		20.07	—	裳11.95	建物規模に裳階を含む
18 富貴寺大堂	12C前	3×4	4	1.20	1.00	角	0.58	0.48	角	合		12.59	10.70	2.18	
19 淨瑠璃寺本堂	1107年	11×4	4	0.80	0.70	丸	0.50	0.63	角	—		12.03	10.50	2.15	九体阿弥陀堂
20 鶴林寺太子堂	1112年	3×4	4+孫廂	0.90	0.82	丸	0.48	0.53	角	側面合		11.93	10.06	2.25	正面に孫廂、正面見付0.62尺角柱
21 醍醐寺薬師堂	1121年	5×4	4	1.20	1.10	丸	—	—	—	—		11.28	9.36	—	
22 法隆寺妻室	1121年頃	27×2	—	1.00	—	—	0.33	0.33	角	合		10.00	—	1.50	東室と対応
23 中尊寺金色堂	1124年	3×3	4	0.83	0.75	丸	0.60	0.73	角	合		12.23	9.76	1.95	一間四面堂
24 白水阿弥陀堂	1160年	3×3	4	1.27	1.16	丸	0.50	0.39	角	合		13.23	9.67	3.15	一間四面堂
25 秋篠寺本堂	13C初	5×4	4	1.60	1.40	丸	—	—	—	—		13.99	11.60	—	古代的平面をもつ堂
26 法界寺阿弥陀堂	13C前	5×4	4	1.80	1.30	丸	裳0.95	0.53	角	合		19.55	17.55	裳11.55	身舎と廂の柱筋そろわない
27 蓮華王院本堂	1266年	35×4	4	1.80	1.60	丸	1.20	0.67	角	合		20.85	15.85	2.70	古代的平面をもつ堂
28 法隆寺聖靈院	1284年	6×5	3	1.18	1.02	丸	0.60	0.51	角	合		14.29	11.10	3.09	南廂径0.74尺角柱。
29 薬師寺東院堂	1285年	7×4	4	1.60	1.30	丸	0.60	0.38	角	否		15.50	13.20	2.70	古代の平面を踏襲
30 興福寺東金堂	1415年	7×4	4	1.86	1.86	丸	—	—	—	—		18.06	18.06	—	古代の平面を踏襲

\*1 : 裳階柱・縁束の身舎柱に対する柱径の割合

\*2 : 縁は改修されている場合が多く、創建当初の様相を表すかどうか明確でない場合が多い

\*3 : 薬師寺東塔、二重・三重の裳階柱筋は本体と合わない

代の例がII型の可能性を残すものの、大半がI型に対応することになるだろう。

ちなみに、紙数の都合上、詳述できないが、柱筋との関係をみると、身舎と廂の柱筋をそろえる例が多く、18富貴寺大堂が一部そろえるものの、26法界寺阿弥陀堂は全くそろえない。やはり冒頭の①～④と対応させるとすれば、①の例が多いということになる。これは礎石建物の場合、身舎と廂の柱頂部をつないで柱を安定させる必要があるためだろう。

**身舎・廂柱と裳階や縁の柱径・柱長** 裳階をもつのは4例(表中1・2・17・26)で、17平等院鳳凰堂が身舎の外周に裳階をめぐらすものの、その他の3例は身舎・廂のさらに外周に裳階をめぐらせており、26法界寺阿弥陀堂は裳階柱が縁束を兼用、すなわち裳階柱の中途に縁板を張る構造とする。総じて、縁は後世に改修されている可能性はあるが、裳階・縁束はいずれも角柱とする。柱径の平均は、裳階柱が0.82尺、縁束が0.62尺で、縁束で最大値をとる27蓮華王院本堂(1.2尺)が突出して太いため、これを除けば0.57尺となる。したがって裳階柱が実寸法では0.25尺ほど太いことになる。ただし、身舎柱に対する裳階柱・縁束の柱径の割合は、最大で0.79(23)、最小で0.33(22)であり、裳階柱と縁束で大差はない。また、柱長は裳階柱が圧倒的に長い。

以上から、裳階と縁束では、柱長がまったく違うが、実寸法では裳階柱がやや太いものの、身舎柱との相対的な規模には大差がないと言えるだろう。また身舎・廂の

柱径と比べると、裳階・縁束の柱はおよそ半分程度であり、格段に小さいことがわかる。

屋根材は、1法隆寺金堂の裳階が板葺で、主屋の本瓦葺とは異なるものの、2薬師寺東塔・17平等院鳳凰堂は裳階・主屋とも本瓦葺、26法界寺阿弥陀堂が裳階・主屋とも檜皮葺で、屋根材の別によって裳階柱を細くしているわけではないことがわかる。すなわち、屋根が身舎や廂と一体化していない、裳階という形式であるために、柱を細くしていると解釈することができる。これは、外周柱が四面にめぐらない、身舎と非一体型の廂の場合にも適用できるとみられる。

以上の成果を、やはり冒頭に述べたI～IIIの分類に対応させるとすれば、裳階や縁は、大きさに格段の差があるⅢ型に分類できるだろう。柱筋との関係では、裳階では、1法隆寺金堂が揃えないものの、他は揃えているが、これも礎石建物であることが理由である可能性を残す。裳階と縁の区別は、柱間寸法など、他の要素で検討する必要があるが、明瞭に分けることはできない。

おわりに 以上、現存建築遺構の分析から、主として掘立柱建物遺構の外周柱列の性格と柱穴規模を推定してみた。身舎・廂が一体型であれば、柱穴は同規模のI型か、やや廂の小さなⅡ型の可能性が大きく、非一体型であれば、柱穴はⅢ型をとると推定できた。柱穴の深さについては、現存遺構からは検討できないが、裳階と縁とでは、柱長が長い裳階柱を深くする必要があると思う。さらなる検討課題としたい。

(箱崎和久)